

項目	具体的取組	評価の観点	評価者	目標	結果	成果と課題	改善策・向上策	学校関係者評価
確かな学力	○児童が主体となって躍動する授業づくり ・学ぶ必然性を感じる課題づくり ・目的意識をもった展開の工夫 ・発言や思考を促す展開の工夫 ・アウトプットとインプットを行き来する相乗効果	(取組指標) 児童が主体となって躍動する授業をめざし、課題や展開、発問、指示を工夫した。	教職員1	100	100	○全ての教職員が学習課題や授業の展開、発問や指示を工夫した授業づくりに取り組みした。 ○ほとんどの児童が主体的に調べたり話し合ったりして授業に参加することができた。 ●普通の授業での学習の様子や児童の意欲が十分保護者に理解されていない。	・話し手として発表したり発信したりするだけでなく、聞き手として正確に聞き取ったり取材したりする力を身につけることが大切である。そのため日頃から自分の考えと比較して聞く学習を工夫して行い、インプットとアウトプットの相乗効果をさらに高める。 ・ホームアンドスクールでの配信やお便りなどで、普通の学習の様子をこまめに広報する。	・もっと学びたいという意欲をどれだけでも持っているか、保護者がつかむのは難しい。また、ホームアンドスクールで普段の様子を知らせても、我が子はどうなのか、個別には分かりにくい。普段の児童の様子を理解してもらうには、児童の様子を生で見ってもらう機会を増やすなどもっと工夫が必要である。
		(成果指標) 授業では、課題について考えたり、調べたり、友達と話し合ったりした。	児童1	80	94.9			
		(満足度指標) お子様はもっと学びたいという意欲をもって学習することができていた。	保護者1	80	76.9			
	○対話的な学びを支えるスキルの習得 ・話形にとらわれない話し合いの場の充実 ・スピーチタイムの活用 ・対話を成立させるスキルの習得	(取組指標) 教育活動全般にわたって、対話の機会を設け、対話力を獲得するための手立てを工夫した。	教職員2	100	100	○全ての教職員が話し合い活動や発表など対話の機会を設けて工夫して指導することができた。 ○ほとんどの児童が相手に伝わるように気をつけて話すよう心がけることができた。 ●家庭では、児童が自分の考えを話そうとしたり話したりする様子が見られなかったと答える保護者が4分の1近くいた。	・対話的な学習を継続していくことで、相手と豊かに対話できる力を確実に獲得できるよう工夫する。 ・学習内容や授業の様子を児童自ら保護者に伝えたり、児童が書いたものや作成したものを保護者が見てコメントを書いたりする機会を増やし、家庭でも学習について話題にできる場を意図的に設ける。	・家庭によっては、児童が自分の考えを語るような機会がないことが考えられる。学ぶ意欲同様、対話的なスキルについても、理解を得るには、もっと工夫が必要である。家庭でもそのような場を期待するなら、児童が考えを家の人に語る場を設け、どんな姿を目指していくのか周知してもらう必要がある。
		(成果指標) 話し合い活動や発表では、相手に伝わるように気をつけて話すようにした。	児童2	80	86.3			
		(満足度指数) お子様は、自分の考えを話そうとしたり話したりすることができていた。	保護者2	80	76.9			
	○個別最適な学びの実現 ・自己決定する機会の確保 ・自分がわからないところを主体的に解決する態度の育成 ・家庭における主体性・自己決定の機会の確保	(取組指標) 教育活動全般にわたって、児童が選択したり決定したりして学習する場面を設定した。	教職員3	100	100	○全教職員が児童自身が選択したり決定したりする機会を増やすよう工夫することができた。 ○ほとんどの児童が自分の考えで選択したり決定したりすることができた。 ○家庭でも児童が選択したり決定したりする場があり、保護者も児童の考えを大事にしていることが分かった。	・今後さらに児童が主体となって行事を考えたり、学習方法を選択したりする場を設定する。 ・これまで当たり前になっていた活動や慣例について、目的や意義を考え、児童が当事者意識をもって見直しを図れるようにする。	・学校公開での児童の様子や活躍ぶりを見ても、1年間児童が主体となって取り組んできたことがうかがわれる。特に運動会や修学旅行、6年生を送る会などの大きな行事では、児童が学校全体を動かし、変革や決定の場を与えられたと聞いている。指示されて動く子ではなく自分で考えて行動できる子、協働する子を目指して、粘り強く育ててもらいたい。
		(成果指標) 授業で自分の考えで選んだり方法を考えたりして学習に取り組むことができた。	児童3	80	88.4			
		(満足度指数) お子様は、自分の考えで選んだり決めたりすることができていた。	保護者3	80	88.4			
	○対話的な学びを支えるICT機器の活用 ・系統的にICT機器を活用するリテラシーの獲得 ・ICT機器を効果的に使った発表や考えの表出 ・ICT機器を活用した意見の交流	(取組指標) 教育活動全般にわたって、ICT機器を日常的に活用し、発達段階に応じたリテラシーを身につけ、学習用具として活用できるよう工夫した。	教職員4	100	100	○発達段階に応じてICT機器を計画的に活用したため、児童がタブレットは手軽な学習用具であると感じることができるまでになった。 ○低学年でも調べたり記録したりなどの操作ができるようになった。 ●家庭学習ではほとんど使用しなかったため、児童がどの程度学習で活用できるのか保護者には理解されていない。	・学校公開日には積極的にICT機器を活用した授業を行い、保護者の理解を図る。 ・児童が社会に出るためにはICT機器を活用する力が不可欠であることを全員で周知する。 ・家庭学習でデジタルドリルなどの課題を積極的に取り入れ、ICT機器が学習用具として活用されていることを広報する。	・タブレットを持ち帰って学習する機会がほとんどないようなので、保護者には、児童がどんな活用力を身につけているか判断しにくい。次年度からは家庭学習でも積極的に活用するということなので、保護者の理解も得られるのではないかとと思われる。学校公開でもICT機器を活用して学ぶ様子を積極的に公開してもらいたい。
		(成果指標) タブレットを使って、調べたり、記録したり、発表や話し合いをしたりすることができた。	児童4	85	94.9			
		(満足度指数) お子様は、タブレットを効果的に使えるよう、年齢相応の活用力を身につけ、学習用具として活用できていた。	保護者4	80	69.2			

項目	具体的取組	評価の観点	評価者	目標	結果	成果と課題	改善策・向上策	学校関係者評価
豊かな心	○考え議論する道徳授業づくり ・モラルジレンマをねらった資料の開拓と授業実践 ・児童の本音や思考を促す発問・展開 ・児童が自己変容を認知できるふり返りの工夫	(取組指標) 児童の本音や思考を促す道徳授業づくりに努め、児童が授業を通して自己変容するよう工夫した。	教職員5	100	91	○ほとんどの児童が道徳の授業で考えを深めることができ、保護者は心の成長を感じ取ることができた。 ●ほとんどの教職員は児童の自己変容をねらって工夫に努めたが、十分ではなかったという担当が1名いた。	・考え議論する道徳の授業を来年度も継続し、思考の深まりや心の成長を促せるよう工夫する。 ・社会では答えが出せない課題も多く、話し合って共に考えていくことが重要となるため、モラルジレンマ(価値観の葛藤)の資料を積極的に開拓し、実践する。	・自分の考えをもち表現できる、考えが違ふ人の意見を丁寧に聞く、少数意見も聞き、理解して合意形成を図る力を身につけることは、社会に出てから必ず役に立つ。日々の道徳の授業で葛藤の場を準備してしっかり鍛えてもらいたい。
		(成果指標) 道徳の授業では、自分はどうか考えたり、友達の考えを聞いて考えを深めたりすることができた。	児童5	85	86.9			
		(満足度指標) お子様は、様々な場面で自分の考えをもつことができ、視野が広がっていることや心の成長を感じる。	保護者5	80	83.3			
	○安心して生活できる学校・学級風土づくり ・マイノリティを大切にしたい話し合い活動 ・発達特性への正しい理解 ・あたたかい心の交流を生む場(学級・異学年・縦割り・交流学級等)の設定	(取組指標) 全ての児童の理解に努め、合理的配慮を心がけ、全校児童をほめるなど、あたたかい風土づくりに努めた。	教職員6	100	100	○縦割り班遊びや大石ランド、異学年での授業交流を行い、あたたかい学校風土づくりに努めた。 ○全教職員で特別支援教育の研修を行い、発達特性をもつ子への理解を深めることができた。 ●集団との関わりや交流の成果が保護者には理解されなかった。	・ホームアンドスクールやお便りを活用して心の交流について保護者が理解できるようにする。 ・授業参観や懇談などで学級の様子を具体的に保護者に伝える。 ・グループ活動や縦割り班活動、異学年交流、福祉学習などを通して、児童が様々な立場に立って考え、行動する機会を増やす。	・家庭では、学校と比較してほとんどの児童が自己中心的であるの思うので、家庭での評価はかなり難しい。少子化が進み、放課後の遊び方が大きく変わっているため、縦割りでの活動や異学年交流の機会を増やして社会性を身につけていってほしい。
		(成果指標) まわりの友達や班の子と仲良くし、安心して生活することができた。	児童6	80	93.5			
		(満足度指標) お子様は、自分中心ではなく、様々な立場に立って自分のできることを考えたり実践したりしていた。	保護者6	80	69.2			
	○安心して生活できる学校・学級風土づくり ・全ての子のウェルビーイングをめざした教育活動 ・同調圧力、多数決ではない合意形成の場の充実 ・児童が考え、自己決定する機会の充実	(取組指標) 教育活動全般にわたって、みんなが満足できるものをめざして、児童が考え、話し合い、決定する場をもつよう工夫した。	教職員7	90	93	○縦割り活動では、上級生がリーダーとなり話し合いをスムーズに進める場面が多く見られた。 ●話し合いでは、活発に発言する児童やリーダー性のある児童の意見に偏っていく傾向が見られ、少数派の意見が活かせない場面があった。	・小グループでの話し合いやペアワークを取り入れるなど、話し合いの方法を工夫し、全ての児童の意見を活かせるようにする。 ・日常的にディスカッションやディベートを行い、全員の意見を大事にして合意形成を図る能力を育てる。	・小グループの話し合いや縦割りでの活動を日常的に行い、様々な発達段階や発達特性、考えの違いを理解する機会をもてるようにしてほしい。社会に出て、合意形成や調和を進められる人を育てることが大事である。
		(成果指標) いろいろな立場の子、困っている子のことを考えて、話し合ったり決めたりすることができた。	児童7	80	91.3			
		(満足度指標) お子様は、みんなが調和したり、全体がうまくいったりすることを大切に考え、行動していた。	保護者7	70	76.9			
	○安心して生活できる学校・学級風土づくり ・複数教員による児童観察と情報交換 ・複数教員による教育相談、支援 ・関係機関との連携 ・SC、SSWの活用	(取組指標) 関わる全ての児童について観察し、気になることは情報交換して、全職員で児童を支援できるよう努めた。	教職員8	90	100	○悩みや困り感のもつ児童をいち早く発見できるよう努め、職員終礼のアンテナタイムで周知したりSCに関わってもらったりするなど、全職員で対応することができた。 ●悩みや不安を打ち明けず、自分の中で溜め込んでしまう児童が4分の1近くいる。	・年度はじめに、SCと協力して「SOSの出し方」の授業を全学年で行い、悩みを打ち明けやすい雰囲気や体制づくりに努める。 ・自分から話し出せない児童もいるので、教育相談の時間を十分に確保し、児童全員の話をも個別に聞く。 ・専門家を招いて講演や演習を行い、ポジティブ教育を推進する。	・SCやSSWなど専門的知見を有する人材、専門機関を活用して、児童と関わってもらうことが重要である。本校は複数で観察、情報交換、支援を進めているので、保護者は心強いはず。さらに活用を進めてほしい。
		(成果指標) 困ったことや悩みを先生やカウンセラーの先生などに相談できた。	児童8	80	76.1			
		(満足度指標) お子様は、自分の思いを話したり相談したり人の意見を聞いたりして、うまくいかないことを乗り越えようとすることができていた。	保護者8	70	75.6			
○安心して生活できる学校・学級風土づくり ・いじめを生まない学級・学校風土づくり ・いじめを早期発見する組織的対応 ・不登校・登校しぶりを防ぐ支援体制の構築	(取組指標)児童の言動に十分注意を払い、いじめや不登校を生まないこと、早期発見するよう心がけ、気がかりなことについては、複数の教員であたるよう努めた。	教職員9	90	100	○全職員で児童の言動に注意を払い、いじめや差別の早期発見に努めた。発見した際には、複数で解決にあたることができた。 ●SNSなど学校では把握できないトラブルが増え、4分の1の児童は自分から行動を起こすことができなかった。	・道徳や学活、集会を利用して、いじめを生まない学級・学校風土づくりを進める。 ・外部機関と連携して情報モラル教育を進め、ネットいじめの未然防止に取り組む。 ・スマホやSNS利用がいじめの温床になる危険性が高いことを保護者に啓発する。	・昨今のSNSでの誹謗中傷で人を自死にまで追い詰める風潮に心が痛む。被害児童の救済、加害児童の心の闇の理解はもちろん、周囲の児童の関わり方についても、今後もお一層工夫して情報モラル教育を進めてほしい。	
	(成果指標) いじめや差別ではないかと思うことを見かけたら、注意したり先生に相談したりした。	児童9	80	75.4				
	(満足度指標) お子様は、からかいや差別などの言動を自分で判断し、問題視することができていた。	保護者9	70	79.5				

項目	具体的取組	評価の観点	評価者	目標	結果	成果と課題	改善策・向上策	学校関係者評価
健やかな体	○健康的で安全な生活習慣の認知と獲得 ・スクリーン機器やブルーライト等についての正しい理解 ・SNS・インターネットの危険性についての正しい理解 ・動画資料(NHK for School等)の積極的活用 ・スマートルールの見直し ・家庭への啓蒙	(取組指標) スクリーン機器やSNSについて正しく理解する機会を工夫し、日常的にその危険性について繰り返し工夫して指導した。	教職員10	90	94	○はなまるテストのカードにスマートルールを載せ、児童への指導や保護者への周知を図った。 ●6月の睡眠学習会では睡眠の大切さやスクリーン機器の危険性について学んだが、多くの児童は気をつけることができていない。 ●家庭では半数近くの保護者が約束を守れていないと評価している。	・スクリーン機器の危険性や心身への影響について、今後も継続して指導する。 ・一律のスマートルールではなく、各家庭で話し合っってルールづくりを行いしっかり守れているか指導チェックして指導を行う。 ・学校での取り組みについてお便りやホームアンドスクールなどで保護者の理解を求める。	・インターネットやスマホの機能は便利な反面、マンマードの高校生拉致にあるように、犯罪に悪用される危険性ははらんでいる。家庭でももっと危機感をもってもらい、家庭でルールづくりを進め、子どもたちを危険から守る意識と体制を整うよう働きかけたい。児童にも繰り返し便利さだけでなく危険性を指導してほしい。
		(成果指標) スマホやゲームを長い時間することは健康に悪く、SNSは危険だとわかって、家でも気をつけて生活できた。	児童10	80	73.9			
		(満足度指標) お子様はスマートルールや家庭での約束を守りながら、スクリーン機器(スマホ、タブレット、ゲーム機器)を使用できていた。	保護者10	75	50.0			
	○健康的で安全な生活習慣の認知と獲得 ・登下校での安全指導 ・防災防犯意識の獲得 ・避難訓練の実施 ・家庭への啓蒙	(取組指標) 防災防犯について日常的に繰り返し指導し、児童の意識を高めるよう工夫した。	教職員11	90	100	○全職員が防災防犯について工夫して指導できた。 ○児童は避難訓練などを通して自助・共助などの意識が高まり、大変よい態度で参加できていた。 ●家庭では、防災や防犯について話題にすることがないのか、あるいは児童が安心しきっていて危機回避の行動をとらないのか判断が難しいが、評価が低かった。	・引き続き学校での取り組みについて保護者に発信し、学校と家庭の全体で危機意識をもって対応できるようにする。 ・大きな災害が増えているので、家庭で非常時にどう行動するか話し合ってもらう機会を設ける。	・日本は世界有数の災害の多い国であるということをもっと肝に銘じる必要がある。また近年、気候変動によって突発的な自然災害も起こっているため、様々な災害を想定した訓練を行う必要がある。学校では在学する6年間に1度は起震車で地震体験をするなど、危機感がもてる訓練を工夫してもらいたい。
		(成果指標) 火事や地震、洪水や不審者が入ってきたときにどうすればよいか考え、訓練に真剣に参加した。	児童11	80	94.9			
		(満足度指標) お子様はふだんから防災や防犯について話題にし、被害に遭わないよう注意して行動していた。	保護者11	75	66.7			
	○健康的で安全な生活習慣の認知と獲得 ・管理栄養士と連携した食育の推進 ・睡眠についての正しい理解と手立ての工夫 ・レジリエンス獲得のための手立ての工夫	(取組指標) 関係機関や専門家を活用して食や睡眠について正しく理解するよう工夫し、日常的に繰り返し指導した。	教職員12	90	100	○栄養士訪問や睡眠講話など外部講師を招き積極的に学習を行った。 ○ほとんどの児童が食や睡眠について気をつけて生活できている。 ●家庭では好き嫌いや睡眠について改善が必要だと考える保護者が4分の1以上いる。	・小学校6年間を通じて、くり返し栄養士による指導が行われているため、食についてはかなり意識できていると思うが、睡眠についての理解が不足しているため、今後さらに工夫して指導を行う。 ・「ここからチェック」を継続して行い、保護者にコメントなどを書いてもらって、家庭でも取り組んでもらえるよう働きかける。	・大人になってから運動習慣や食習慣や睡眠についての改善を試みるのは難しい。子どもの時からの蓄積、生活習慣が生涯に大きく影響すると思われる。 今後も、繰り返し運動や食、睡眠について、科学的な根拠を織り交ぜながら指導をしてもらいたい。
		(成果指標) バランスよく食べ、よい睡眠をとれるように、気をつけて生活した。	児童12	80	83.4			
		(満足度指標) お子様は、栄養のバランスを考えて食べたり、よい睡眠がとれるよう気を付けたりして生活していた。	保護者12	80	73.0			
	○楽しく運動するしかけや手立ての充実 ・縦割り遊びや異学年でのスポーツ交流 ・はぴりゅう広場の活用 ・活動場所や活動時間の保障	(取組指標) 日常的に運動に親しめるよう、様々な機会を活用して運動するよう工夫して指導した。	教職員13	90	94	○ゆとりのある校時や休み時間の確保に努め、学年合同の体育や異学年との交流など運動の機会を工夫した。 ○体育委員会が全校遊びを企画したり業間マラソンや縄跳び、鉄棒などでカードを活用したりして運動するしかけを工夫した。 ●家庭では運動の機会が少ないようで、保護者の評価は低かった。	・体育の学習カードを保護者にも見ってもらうようにし、学校での体力づくりの進捗を知ってもらう。 ・ダンスやゲームなど児童が好むものを積極的に取り入れ、幅広く運動する機会を設ける。 ・はぴりゅう広場など県の取り組みについて周知を図り、親子で楽しむ機会への積極的な参加を働きかける。	・はぴりゅう広場がもっと周知され、家庭でも取り組めるようになるとうい。
		(成果指標) 体育や大石っ子タイム、休み時間には、体を動かすことができた。	児童13	80	87.6			
		(満足度指標) お子様は、日頃から運動に親しみ、屋内外で運動を楽しむことができていた。	保護者13	80	75.7			

項目	具体的取組	評価の観点	評価者	目標	結果	成果と課題	改善策・向上策	学校関係者評価
信頼される学校	○大石地区のよさを理解し、地域の人と繋がる、関わる機会の充実 ・地域の自然や施設を活かした校外学習 ・地域の歴史や自然、産業について知るための出前授業 ・地域人材を活かした体験活動の充実	(取組指標) 地域の人々、施設や自然、環境を活かして活動する機会を設け、大石地区のよさを感じるよう努めた。	教職員14	90	100	○地域の人との関わりや、まち協のや関係機関の出前授業が増え、昨年以上に充実した活動を展開することができた。 ○地域に出かけたり、地域の人と協働したりして歴史やよさを学ぶことができた。 ●ブログや学校だよりで随時発信してきたが、保護者からはよく学んでいるという評価が得られなかった。	・ふるさと教育について学びの洗い出しを行い、スポット的な学習ではなく、小学校6年間を通して系統的に学ぶ機会を確立する。 ・シンボリックな地域行事や地域の宝をしっかり児童が言えるよう、日常的に話題にする。 ・児童が自ら考えて地域に働きかける活動を企画し、さらに地域と関わりをもてるよう工夫する。	・保護者の満足度が極端に低いのが気になる。地域からの学びが足りない、あるいは地域との協働が足りないという考えなのだろうと思われる。今年度はかなりまち協と連携した教育活動が行われている。また学年によって地域にも出ていって関わりをもとうという工夫も見られる。学校外でも地域と関わりがもてるよう、地域全体で考えたい。
		(成果指標) 地域の人(まち協のみなさんを含む)とあいさつや話をしたり、いっしょに活動したりして、大石地区のよいところを知ることができた。	児童14	85	89.8			
		(満足度指標) お子様は、ふるさと大石地区のよさについて地域の人から学んだり、地域の人と協働したりしていた。	保護者14	85	42.3			
	○開かれた学校づくり ・地域の人材を活用した出前授業や体験活動 ・関係機関や専門家を招いての出前授業 ・地域ボランティアの活用	(取組指標) 地域の人材や外部講師を活用して学習する機会を設け、開かれた学校づくりに努めた。	教職員15	90	100	○専門家による講演会や地域の方による出前授業・実習活動、地域の施設や会社を見学する校外学習などを積極的に取り入れることができた。 ○ほぼ全員の児童がしっかり地域で学ぶことができたこと捉えている。 ○保護者の満足度はほぼ目標値に達し、地域人材の活用について高評価だった。	・今後も様々な分野の専門家に来てもらったり、保護者や地域の方を地域ボランティアとして依頼したりして積極的な人材活用を図る。 ・「児童が受ける」活動から「児童がしかける」活動に転換できるよう工夫し、出会う機会の少ない人材(専門家・専門機関・従事者)にも出会えるような学習活動を展開する。	・まち協による学校農園活動やふるさと学習、福祉団体やスポーツ団体の出前授業などがさかんに行われていることは評価できる。 ・大石地区にはふれあい祭りがあるので、コロナ禍が明け、もっと子どもや保護者が参加しやすい、参加したいと思える行事になるよう、工夫していくことが必要である。 ・大石コミセンの活用についても連携して工夫を図ってほしい。
		(成果指標) 校外学習や出前授業、自然教室や修学旅行などで、地域の方や施設の方からしっかり話を聞いて学習することができた。	児童15	85	96.4			
		(満足度指標) 学校は、地域ボランティアや外部講師を招いた学習に取り組む、学びを広げたり深めたりするよう工夫していた。	保護者15	85	84.6			
	○学校への理解と信頼関係を築くための工夫 ・積極的な情報発信(HP・学校便り・学年便り) ・地域の方との対話・交流 ・地域ボランティアの活用と交流 ・保護者、PTAとの対話・連携	(取組指標) 地域や家庭に向けて、積極的に情報を発信したり対話や交流の場を設けたりしながら学校の教育活動について理解を図った。	教職員16	90	100	○学校だより、学年だより、ホームページ、ブログ、ホームアンドスクールなど様々な媒体を活用して発信に努めた。 ○保護者も情報が積極的に発信されていると高評価だった。 ○児童は発信される内容について家庭で話題になることもあるようで、お便りやブログで発信してもらうことに期待感をもっていた。	・今後も、様々な媒体を活用して学校の様子を発信できるよう努める。 ・年5回の学校公開日に加えて、各学年の発表会などには、自由に参観してもらう機会を設ける。 ・見守り隊や地域ボランティアなどたくさんの方が児童の支援に関わっていることに感謝できるよう、保護者に啓発する。	・毎週発行される学校だよりは写真がふんだんに使われ、大変見やすく分かりやすい紙面になっている。楽しく拝読している。 ・感謝の会を昨年度からして、児童や学校からの感謝の意が伝わり、ボランティアはやりがいがある。今後も温かい心の交流を大事にしてほしい。
		(満足度指標) 学校は、積極的に情報を発信して、どんな教育活動が行われているか広報に努めている。	保護者16	80	89.8			
	★ 業務改善への取組	(取組指標) 手をかけ過ぎることがないよう、児童の自律性を高める工夫をした。	教職員17	85	100	○全職員が、与えすぎ、手をかけすぎにならないよう、児童の自律を意識して指導にあたった。	・人口減少が不可避となり、AIの比重や多様性がさらに広がる社会を生き抜く人材を育成するため、どんな教育が必要なのか考え、全教職員で取り組む。	・教員のなり手不足が叫ばれる中、工夫して仕事を進めていることに感謝したい。先生方にも家庭があり、心身の健康を維持することが大事なので、適切に業務改善を進めながら、笑顔で子どもたちに向き合ってもらいたい。 ・幸せな教職員が幸せな子どもを育てるという意識に共感する。
(取組指標) 全ての児童を全職員で育てるということを念頭に組織で教育活動を進めた。職員それぞれの強みを生かして校務にあたった。		教職員18	85	100	○報告・連絡・相談を頻繁に行い、何かあれば組織で対応するようにした。			
(取組指標) C4thの活用、会議のスリム化、オンライン等の活用、校内備品、資料、データの整理に努め、業務改善に取り組んだ。		教職員19	85	100	○慣例的に行っていることを見直し、情報共有・情報交換を行って全員で業務改善に努めた。			